

Junko Higasa

たてまえ

茶道の点前でも建築の建前でもなく、人間の社会的建前である。私は人を傷つけないように配慮はするが、殆ど本音で生きている人間である。その理由は「人間たかだか100年くらいしか生きていないのに、延々と建前で生きていたら自分という個性がないのではないか」という気持ちから発している。死ぬ時に「本心を言えばよかった」などと思うのは真っ平である。人に好かれる自分を作るのではなく、自分を作った結果それが好かれようが好かれまいが構わないという開き直りである。しかし私は「自由」とは「自分の欲求を通す」ことではなく「社会の中の自由」と心得ている。

ある時、先生が「ご指導ご鞭撻いただけますようお願い申し上げます」と書いてくる人を信用しないとおっしゃった。私もその言葉は建前として捉え信用しないから、自分でも使わない。本気で指導を受ける覚悟がどれほどあるかということである。ましてや指導能力のない一般人に、同様にその言葉を投げかけるのは何の意味も成さない。そして私は引越通知の葉書に「お近くへお出かけの際はお立ち寄りください」という建前の一文を入れなかった。この言葉は日本人の特質かと言えばそうでもない。欧米でも「お立ち寄りください」は建前であり、具体的に何日何時にと招待を受けて初めて訪問が叶う。要するにその言葉は事実として実現されない前提の上に使用される建前である。建前はどこまで人間の感情を潤すだろうか？

このように遠慮なくものを言う私が驚き嬉しく思うのは、世間的に「偉い」「有名」と認証されている人や、あらぬ欲を出さずに自然に自分の道で自分を磨く人が建前を使わないことである。そういう方々からいただく葉書には言い知れぬ感動がある。そこには真実しか書かれていない。「驕りが無いから発展するのだ」「欲がないから美しいのだ」と思う。ちなみに私は出身校を吹聴する人間と、隠す人間を信用しない。いずれも自分をよく見せたい人間のように思う。

そしてまた私は「尊敬しています」という言葉の安売りも信用しない。そんなに尊敬できる人間が世の中にゴロゴロいるか。また「思いやりがある」という言葉もあまり信用しない。これについては小学生時代の思い出がある。卒業を控えたある日「自分の友達の長所と短所を書け」という課題が出た。決して欠点非難のためではない。友情というものを理解させるためである。集まった答えに先生が烈火のごとく怒った。『みんな「思いやりがある」と書いているが、本当の「思いやり」とは何だか知っているか！？そんなに思いやりのある人間ばかりか？』『本当に思いやりがあるならいい、そうでなければその言葉以外で表現しろ！全員書き直し！』それはハッとさせられた出来事だった。私が通った小学校・中学校は実に個性的な先生が多かったが、逆に人間らしくてよかった。本気は通じる。建前や詰め込みで教育されずに良かったと思う。

また逆にこうも思う。本音とは人間の醜い部分でもある。上記のような性善説的表層的本音は美しい世界に留まるが、もっと究極に突き詰めれば人間の本音とは冷たいものである。時には残酷である。それを補っているのが人間の中に存在する無意識の愛なのかもしれない。その愛を持つのは漱石の言う「魂の会話」から生まれる心のふれあい。それこそが生きていることを実感できる唯一の証かもしれない。(2012.3.19)